

## ●特別展



クロード・モネ 『玉房付の帽子を被ったミシェル・モネの肖像』  
1880年 マルモッタン=モネ美術館  
© The Bridgeman Art Library

## こども展 名画にみるこどもと画家の絆

2014年7月19日(土)—10月13日(月・祝)  
<http://www.ntv.co.jp/kodomo/>



ピエール＝オーギュスト・ルノワール 『ジュリー・マネの肖像、あるいは猫を抱く子ども』  
1887年 オルセー美術館  
© RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF – DNPartcom

この展覧会はパリ・オランジュリー美術館で開催された展覧会“Les enfants modèles”（「モデルとなった子どもたち」と「模範的な子どもたち」のダブルネーミング）を日本向けに再構成したものです。

テーマは描かれた側＝モデルとなった子どもの体験と、描いた側＝子どもたちの親、または子どもたちと親しい関係にあった画家の想いです。画家に焦点を当て、その技術や特徴を鑑賞するという従来の展覧会の枠組みを超えて、子どもたちの目線を通じて作品に秘められたメッセージやエピソードを読み解くという、絵画の新しい鑑賞方法を提案する画期的な展覧会となります。

モネ、ルノワール、ルソー、マティス、ピカソを中心とする19～20世紀の主にフランスで活躍した画家たち約50人による、およそ90点の作品が展出されます。オランジュリー美術館といえばモネの「睡蓮」の連作で有名ですが、そのモネが描いた次男のミシェルはまだ2歳、愛情あふれるタッチで描かれた可愛らしい姿です。ルノアールは自身の子どものみならず、交流の深かった印象派の女流画家ベルト・モリゾの娘、ジュリー・マネの8歳の猫を抱く姿を描いています。ルソーの作品は、彼が生涯に描いたと確認されている4枚の子どもの絵のうちの1点となる、たいへん貴重なものです。ドニが三男のフランソワ、通称アコがトランペットを吹く姿を描いた作品は、ドニ家が代々大切にしてきたもので、本展覧会の趣旨にご賛同頂いたご遺族の協力のもと、日本で初公開されることになりました。

こうした作品を通じて、「描く側＝大人」たちは何を残そうとし、「描かれる側＝子ども」たちは当時何を想つたのでしょうか。肖像画の変遷と時代の変化を辿りながら、作品に秘められた両者の想いに迫る本展に、どうぞご期待ください。



アンリ・ルソー 『人形を抱く子ども』  
1904-05年頃 オランジュリー美術館  
© RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Franck Raux / distributed by AMF – DNPartcom



モーリス・ドニ 『トランペットを吹くアコ』  
1919年 個人蔵  
© Archives du catalogue raisonné MD  
Photo: Olivier Goulet

## コレクション展

### 寺社絵—神仏と人が交わる絵画

2014年6月24日(火)―7月6日(日) 7月19日(土)―8月31日(日)

寺社は神仏をまつる聖なる空間です。神仏と人が交わるには不思議な物語、美しい風景、厳かな儀礼を描く絵画が必要でした。縁起絵、名所絵、祭礼図、肖像画など、彩り豊かな寺社絵の世界をご鑑賞下さい。



北野天神縁起絵(第四幅)・部分 南北朝時代・14世紀 京都・和束天満宮蔵

### 江戸の版本と百鬼夜行絵巻

2014年6月24日(火)―7月6日(日) 7月19日(土)―8月31日(日)

江戸時代も後期になると、出版文化は隆盛を極め、さまざまな版本が刊行されました。それらの版本の中には、絵師による本格的な挿絵も多く見られます。当館所蔵の原在中筆「百鬼夜行絵巻」とともに、少し怖くてどこか面白い版本の挿絵をご紹介します。



浦川公佐『金毘羅参詣名所図会』挿絵 江戸時代 弘化4年(1847)刊 個人蔵

### 煙管筒 明治・大正の細密工芸

2014年6月24日(火)―7月6日(日)

7月19日(土)―8月31日(日)

煙草入れ・煙管筒・根付・緒締は袋物商が中心になり様々な職人に依頼して作らせていました。明治になり廃刀令がでると腰帶に煙管筒を挿すことが流行します。この後、紙巻煙草が普及するまでの短い間ですが、煙管筒制作には様々な工芸家があり、技を競いました。



池田泰真(1817-1882)  
宝尽し蒔絵煙管筒  
如意に錢素地蒔絵煙管筒  
光真銘



鍋井克之(1888-1969)「春の浜辺」 昭和6年(1931) 本館蔵(鍋井澄江氏寄贈)

### ようこそ信濃橋洋画研究所

2014年6月24日(火)―7月6日(日) 7月19日(土)―8月31日(日)

大正13年(1924)、関西の洋画壇で活躍していた鍋井克之らによって信濃橋洋画研究所が設立されました。大阪における洋画研究の拠点として多くの画家を輩出し、展覧会を主催するなどの活動を行った研究所に焦点をあて、指導者の鍋井や国枝金三、そこで学んだ画家たちの作品をご紹介します。

### 工芸 かたちと文様

9月2日(火)―10月13日(月・祝)

原始から19世紀中頃までの中国と日本の金工品・陶磁器・漆工品を展示します。双方の地域の工芸作品における器形や装飾など、影響関係の強弱をはじめ、相互の相違と関連性をお楽しみください。



錫絵 横閣山水図火炉  
尾形乾山(1663-1743)作  
江戸時代(18世紀)  
本館蔵



青銅 饰饕文鼎  
西周時代初期  
(紀元前11-8世紀)  
本館蔵